

戦争を知らない世代へ ⑥ 沖縄編

沖縄戦

— 痛恨の日々 —

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ⑥ 沖縄編

沖縄戦

— 痛恨の日々 —

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑥
沖縄戦——痛恨の日々

昭和50年 6 月23日 初版第 1 刷発行

編 者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

電話 東京(294)8731(代) 振替口座 東京117823

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

©1975 printed in Japan 0036-7006-4438

発刊の辞

昨年六月二十三日「沖縄終戦の日」を記念し、反戦出版第一集として『打ち砕かれしうるま島』を発刊した。それに対し各界から種々の反響が寄せられた。とくに沖縄全島の中学、高校、大学への贈呈に各校とも反戦教育の立場から賛意を寄せていただき、編集メンバー一層心強く思っている。沖縄大学々長の新屋敷幸繁氏からは、三十人の女性が筆をとっているところから「女性の手に成る『沖縄戦平家物語』である。……何物をおいてもこの書物から読んで下さることを、世界中の人に呼びかける所以である」との賛辞をいただいた。こうした賛辞と期待に励まされ、第二集の準備がすすめられた。

この本のサブタイトルに「戦争を知らない世代へ」とあるが、体験の収集編さんにあたったメンバーもまた戦争を知らない世代である。ここにこの本のもつもう一つの意義がある。取材活動に走った多くの青年は異口同音に語っていた。「戦争とはこうも悲惨なものか」「二度と戦争を起こさせてはならない」「我々が断じて起こさせまい」と。

ともすれば直接的に受けとることの出来なかった反戦平和の問題が、この活動を通じて、青年

個々の胸中に反戦へのたいまつがともされ、それが確かな平和の砦となって構築されゆくことを知ったのである。

私達はこの平和への波動を全世界にまで高め、人類が二十一世紀へ生きのびる手がかりとしていきたい。今年は終戦三十年目にあたり沖繩はここに本土復帰満三年を迎えた。民衆にとって復帰とは平和憲法の下、基本的人権が保障され第九条の平和への復帰であったはずである。しかし現実はどうか、軍事的には日米安保体制の要石としての位置は動かず、復帰後配置された自衛隊は五千人に達しているという。又米兵による犯罪も後を断たない。平和憲法とはまさに名ばかりの空洞化憲法ではないかと叫びたい。政治レベルの問題はさておき、私達は生命尊嚴の仏法理念を基調として、青年の正義と情熱を日常活動の中に活かしていきたい。平和楽土は庶民の平和を愛する心情の強き連帯により建設されることを信念として進んでいく決意である。

最後に取材活動、編集活動に献身的に働いて下さったメンバー、出版製作にあたってくれた出版委員会のメンバーに対し深く感謝の意を表するものである。

昭和五十年六月

創価学会青年部沖繩県青年部長

新垣 昇

目次

発刊の辞 1

南部

終戦まで……………	島袋松四	10
沖繩戦へ……………	狩俣恵綱	19
臨時召集された私……………	内間良和	40
地獄絵巻の摩文仁ヶ岳……………	新崎善秀	42
日本兵に捨てられた私達……………	吉元隆	46
惨めな国民学校時代……………	高安ハツ子	49
日本軍国主義と沖繩人……………	古堅宗一	56
最後まで生き残った私……………	与那覇トシ	58
死体置場に捨てられた私……………	渡口竹夫	70
死からの逃亡……………	星野文子	75
死体の側で呻吟していた私……………	吉本俊雄	79
全てを振り捨てた私……………	又吉光子	82
攻戦か、自決か、捕虜かノ……………	池原喜春	89

防衛隊員として戦った私……………平安名幸彦 93

日本兵も敵だった……………中根文子 97

沖縄の悲惨は日米両軍から……………上原真徳 102

残酷な仕打ちは女性と子供に……………新垣茂子 107

逃げ惑った司令部……………新垣隆生 113

突如として解散した工作隊……………富名腰宏 117

離島

一兵士として死線の中を……………大村真一 128

伊江島での空襲……………親泊智恵 135

艦砲射撃に草木も絶えて……………末吉亀二 139

空襲の中でお産……………長崎カニメガ 143

戦闘・終戦・内地人……………神山長善 145

西山へ籠もって……………吉里信子 148

戦争に殺された我が子……………照喜名カメ 151

衛生兵の使命を感じ……………上地俊夫 155

終戦の後……………	上原マカト	159
上陸して来たアメリカ兵……………	新城文子	163
夜中の避難……………	東江ヨシ	167
渡嘉敷島の集団自決……………	安座間豊子	170
あとがき……………		191

沖縄戦

――

痛恨の日々

南部

終戦まで

しまぶくろ まつし
島袋松四（62歳）

私は名護町（現在は名護市）七曲りに添った数久田に住んでいました。

私の部落は山で囲まれたところで、奥の方には轟の滝があります。西の方には広々とした名護湾がひらけ、本部半島の八重岳、嘉津宇岳の連山。その先には伊江島が眺望できるところでした。わずかばかりの段々の畑を耕し、山に入って、木炭づくりの仕事をしていました。

二十三歳の時、赤紙がきて、私は住みなれた故郷を離れ、熊本の六師団に入隊しました。そこで三年間、二十六歳の十二月二十八日まで勤めました。

その間（昭和十三年ごろ）に私の所属していた富先部隊に、中国の戦地への移動命令が出ました。私は陸軍二等兵でした。部隊は真夜中に行動を開始し、私たちは中国の北先（ブラヤマ）の浜へ艦から上陸しました。そして空き家で一夜を明かしました。

それからは休まずの行軍で中国北部へ向いました。茫漠たる感じで、地平線まで陸地が続いています。重い荷物を背負った完全武装です。汗をぐっしょりかいて、黙々とした行軍でした。麦

畑が広がり、現地の住民は日本軍によって一定地域に集められていたようです。

現地の女の人が三々五々に集まってきて、こびた眼で呼びかけ、何かもらおうとしたりしました。やっとの思いで、中国北部に着いてみると、現地はどうもないということでした。それで二週間の行軍を終えて、熊本の一部隊へ帰ってきました。初めての行軍で、慣れない私にとってはきつい行軍でした。それでも敵地においてはいつでも戦って死ぬ覚悟はできていました。

行軍中、常に友だちと語り合い、励まし合っていたことは、国家（天皇）があるから自分はあるのだ。だから国家（天皇）のために死ぬことは最高の名誉であるということでした。「敵の中に入ったら生きて帰るな。死にきたのだから戦争を怖がってはいけない」ということを私たちは常に教えられていたのです。

私の体には、徹底した軍国主義教育がたたき込まれていたようです。その後、除隊になり、なかなかいい郷里へ帰り、以前の山仕事に戻りました。

そうこうしているうちに、第二次世界大戦に突入し、物情騒然として、人々の心も不安な日々が続きました。

昭和十七年のころ、伊江島の飛行場建設があり、村の割り当てで一か月くらい日本軍に徴用されました。

当時の伊江島は、今のようになんてなく、幾つもの丘が連なっていました。私たちの仕事は、

ダイナマイトで爆破して平たんにする作業でした。

ダイナマイトの爆発と同時に、作業員は掘られた溝にかくれるのですが、ある日のこと、一人の青年が飛んできた石に頭を碎かれるという痛ましい事故が起こりました。その青年は読谷村から来た若者で、年齢は二十歳くらいでした。私たちは泣く泣くその死体を家まで届けました。

工事は安全性に乏しく、このような事故はたびたび起こりました。

第一回の役務が終わって、また村の割り当てで、二週間ぐらい伊江島へ渡りました。作業は重労働でした。水もなく、遠く離れた部落の井戸から水を運ぶのも大変な仕事でした。

いよいよ、サイパンも玉砕したとの情報が流れ、次は沖縄だということで、戦争の暗雲が重苦しくのしかかってきました。

沖縄戦を予想して軍の動きも活発になり、いたるところで陣地構築のため、住民が駆出されました。私も再び軍に召集され、石部隊所属となり、首里防衛に加わりました。

昭和二十年四月一日米軍が北谷村の浜に上陸を敢行し、巨大な物量にものを言わせて、破竹の勢いで首里を目指して南下してきました。「ビュー、ドンドン」と艦砲射撃で弾が雨のように飛んできます。連日のように、空からは、おびただしい数の爆弾が投下され、海上からは、海を埋め尽くすほどの無数の艦から砲弾が飛んできます。たくさん砲弾が打ち込まれ、山野は土をむき出し、さく裂で大地は常に振動します。

特に日本軍の主力部隊で固めた首里は猛烈な集中攻撃を浴びました。牧港から首里に連なる丘陵地帯は、日本軍も、二重、三重に防御を固め、必死の防戦でした。米軍は、牧港の浜に部隊を集結して新兵を次々と繰り出してきました。日本軍も肉弾戦を展開、押し返すは、また押し返されるということを、何回も繰り返すほどの激戦でした。

私は首里のトントン壕で、初年兵と防衛隊員の指揮に当たっていましたが、与える銃もなく、竹ヤリを持たせ防衛隊員は気の毒という以外ありません。敵の物量の前で、このような貧弱な装備で、死をかけて戦わなければならなかったのです。

この一帯の戦場で、防衛隊員や初年兵がおびただしく死にました。また、童顔のあどけない初年兵は、常に戦闘の最前線にやられました。擲弾筒は効果がありませんが、これとて敵の物量にはどうしようもありません。

浦添の経塚あたりは、敵の戦車と肉弾戦が展開されました。背中に地雷爆弾をもって、敵戦車に飛び込むという戦いでした。

それに参加したのは、まだ幼ない学徒兵や二十歳前後の初年兵でした。

この地域は米軍も日本軍もおびただしい血を流したのです。流れた血で山野が赤く染まったと言っても決して言い過ぎではないと思います。一日に何百人もの人が死んでいったのです。日本軍の猛烈な肉弾戦に米軍も攻めあぐんで、二か月ほど戦闘は続いたようです。

当時、トントン壕あたりは、終日、雨がしとしと降っていて、それが壕の入口の上から土を落として、入口も出口も分らないというありさまでした。

私たちは昼夜にわたる戦闘で、服は破れ、ホオはこけ、ヒゲはぼうぼうと伸び放題でした。壕の少し開いた穴を押しのと、やっと出口が現われました。そこで、後退命令も出ていたので、壕を出て後退したのです。

ピューッ、ドン。ピューッ、ドン。艦砲弾がさく裂する中を退却しました。砲弾が十メートルおきにさく裂することも分かりましたので、くぐり抜けながら逃げました。たぶん六月の五、六日ごろであったと思います。毎日の激しい戦闘で何月の何日であるかも分かりませんでした。壕を出て、外を見て驚きました。樹木で覆われていた平良丘陵は地膚がむき出しになり、一草木もないほどに変ぼうしていました。

千古の大本が生い茂り、沖繩の歴史をとどめる文化建造物を残していた首里は見るかげもなく無残に破壊されていました。

そこら中に死臭がただよい、あちこちに真っ黒に焦げた死体がころがっていました。その中で仲間と二人で、首里城の崩れた石の門のそばを隠れながら後退しました。首里城あたりはすでに米兵でいっぱいでした。近くのキビ畑の中に隠れながら、腹ばいになって識名園の大墓の方に行きました。